

序文

日本オペレーションズ・リサーチ学会

高校生のためのOR研究部会 主査 若山 邦紘

福岡のAPORS94の年にもちあがった「高校生のためのOR」研究部会も3年間の活動に一応の終止符を打つことになった。高校生や高校教員をターゲットにして分かりやすく身近な題材で、面白い副読本づくりをしようと思ったものである。過去、2回のOR誌での特集、和歌山県高等学校教育研究会数学部会と共催のシンポジウム、情報処理学会数理系科目教育研究会への参加発表などを行ってきた。このような地味な活動の中から生まれてきたのが「出前授業」である。シンポジウムの開催地であった和歌山県の一高校からのリクエストであった。今まで前後3回、日高高校(若山邦紘、法政大)、田辺高校(高橋幸雄、東工大)、日高高校(逆瀬川浩孝、早稲田大)への出前を実施し、本年秋には日高高校に柳井浩(慶応大)が出前する予定になっている。高校生たちは素直な反応を見せた。興味がない、分からないという生徒は75名中2名であったのは、出前持ち自身の驚きであった。多くの生徒の「数学は社会に出て何に役立つのだろう」という疑問に対する一つの答えになったし、パソコンの威力を目の当りにして、コンピュータに興味を抱いた生徒も数知れない。

今日のシンポジウムに際して、研究普及委員会から「高校の教員を対象とする企画を立てたい」と当研究部会に相談があった。われわれの経験をこのシンポジウムで役立てることが出来れば幸いであるし、あわよくば「東北地方からの出前注文」がくるきっかけになればと協力することになった。プログラムにあるように逆瀬川さんの出前授業の実践報告と受け入れ高校から嶋田先生の生々しい裏話などが聴けるものと思う。

高校生というのは、われわれの想像以上に敏感に物事を感じ取る。数学だけを教えても面白がらず、情報処理だけ教えてもまた面白がらず、それらが相俟ってはじめて意義を感じ興味を抱くようになる。社会科学と自然科学とが上手く溶け合った教育をしなければならぬ教員は自分の狭い専門領域では対応しきれなくなる。いやはや大変なことである。